Treatment Manual for Anorexia Nervosa:
A family-based approach. Second Edition.
By James Lock and Daniel Le Grange

家族をベースとする治療

神経性やせ症治療マニュアル

第2版

ジェームズ・ロック　ダニエル・グランジ
永田利彦：監訳

金剛出版

目次

エピグラフ
謝辞
第2版に先立って
初版に先立って

序文
第1章｜家族をベースにした治療
第2章｜第1段階　初期評価と治療設定
第3章｜セッション1　初回面接
第4章｜セッション1の実際
第5章｜セッション2　ファミリーミール
第6章｜セッション2の実際
第7章｜第1段階の残りの部分（セッション3〜10）
第8章｜セッション8の実際
第9章｜第2段階を始める　患者が自分自身で食べるのを助ける（セッション11〜16）
第10章｜第2段階の実際
第11章｜第3段階の開始　青年期の問題（セッション17〜20）
第12章｜第3段階の実際
第13章｜完了症例の要約
第14章｜解題　摂食障害に対する心理療法，最新エビデンスとその実効性

　本書は青年期の神経性やせ症の治療者向けマニュアルである。
　現在、青年期の神経性過食症治療の第一選択でもある。以前は、摂食障害といえば神経性やせ症であり、神経性やせ症治療といえば、入院治療であった。1980年代の摂食障害患者の急増に対応して、先進諸国では次々と摂食障害専門病棟が創設された。しかし、現在、入院期間は大幅に短縮され、一方、退院後すぐに再発することも稀ではない。集中的治療の人件費による高額な入院費が原因とされてきたが、背景にある精神病理の変化の理解が重要である。
　実は、近年家族全体で摂食障害に立ち向かうことができれば外来治療が可能なことが明らかになってきた。そもそも前世紀的な「家族から引き離す」という考えが誤謬であることが指摘されて長いが、一致団結して戦うことをマニュアル化されたことはなかった。「わかってはいるのに実現できないこと」がマニュアル化されたことは驚きである。
マニュアル化された精神療法、エビデンス重視は、個人的な経験だけに基づく「怪しげな治療」を排除する利点があった。操作的診断とマニュアル化された精神療法は最も基本的な到達点であり、初学者にとっては、それに達していないと次はない。
　本書ではマニュアルに凝り固まらず各段階における治療アプローチの詳細と合わせて、その都度の過程における家族の関わり方を詳述しており、必読の書となっている。

この10年，家族をベースとする治療（FBT）が広まるにつれて，寄り添いを超えて，摂食障害を捨て去るように強く接することの重要性が，少しは知られるようになったのはないかと感じている。……慢性になればなるほど，摂食障害には厳しく，生きづらさには温かくという基本がしっかりしていないと診ていられない。……（監訳者「あとがき」より）

ジェームズ・ロック
ダニエル・グランジ
永田利彦：監訳

Ψ
金剛出版

摂食障害治療のエポックメイキング！

患者・家族・セラピストが一致団結して
立ち向かうための治療マニュアル

Ψ
金剛出版